

挑戦できる町、鯖江

～鯖江キャンパス設立して学生を呼び込もう～

鯖江 A 班 BASABASA

明治大学	3 年	影山千春
	2 年	山川修平
	1 年	岸本明香里
	1 年	鈴木翔也

目次

1. はじめに
2. 鯖江市について
3. 企画の目的
4. 企画概要と分析
5. 四つの講義例
6. 企画実施に伴う相乗効果
7. おわりに

1. はじめに

今回、私たちは明治大学社会連携機構が推進する創業者出身地学生派遣プログラムに参加し、福井県鯖江市において、「若者が住みたくなる・住み続けたくなるまちづくり」をテーマに地域活性化への提言をさせて頂いた。地域住民の方々や鯖江市役所の方々との熟議、現地での調査・取材・体験を通して、都会で大学生活を送る私たちなりの目線から、主に若者の移住・定住問題に関して2泊3日熟考した。以下が私たち「BASABASA」の政策提言である。

2. 鯖江市について

今回の現地調査を得て私たちは鯖江市を下記のように分析し、表に纏めた。

良い点	悪い点
(1) 職員の方のサポートが手厚い (2) 若者を受け入れている実績がある (3) 補助金等が豊富	(1) PR 方法 (2) 話題性のある観光名所が少なく、イベントは多いが長期的な集客力が乏しい

鯖江市を調査してまず感じたことは、市職員の方々のサポートがとても手厚いということであった。若者に対してのみならず様々な補助金が設けられており、老若男女への金銭面でのサポートも充実している。また、鯖江市のみならず県内、県外からの若者を受け入れている実績も豊富だ。それにもかかわらず、鯖江市のサポート体制が充実していることは、若者を含めあまり知られていないのが現状であり、PR 方法には見直しが必要だと考える。また、有名な観光名所が少ないため、観光客を集めることは困難な状況にある。

私たちは鯖江市の良い点を活かし、悪い点を克服する方法を模索した。最も注目したのが、鯖江市は「挑戦しやすい街」ということである。鯖江市は前述の通り、市のサポート体制が整っており、好奇心や向上心旺盛な若者が何かを挑戦するのに適した街であると私たちは考えた。そこで私たちは、学生が鯖江市で挑戦するための仕組み、「鯖江キャンパス」の設立を提案したい。

3. 企画の目的

鯖江キャンパス設立には、鯖江市側と参加学生側の二側面からの目的がある。下記のように纏めた。

鯖江市	学生
<ul style="list-style-type: none">・ 鯖江市に貢献する学生の育成・ 都心の学生の将来の選択肢に「鯖江」を増やす(Ex. 河和田アートキャンプ)・ 都心と地方のより密接な締結	<ul style="list-style-type: none">・ 学生が活かした学問を学ぶ・ 日本における地方問題の解決法を学ぶ・ 座学とは異なり、問題を分析・対策まで経験できる

● 鯖江市の目的

鯖江キャンパスでは、鯖江市内で地域活性化について学んでいくこととなる。一般的な地域活性化の内容と共に、基本的には鯖江市の産業、気候、市民性に関わるものが多く設けられる。そのため、学生は、基礎的な知識のみならず、鯖江市で活用できる知識を身に付けることができ、それは鯖江市に貢献する学生の育成へと繋がる。また、河和田アートキャンプのように、鯖江市で活躍した学生がインターンするという事例もある。学生時代に鯖江市で活動することは、将来の選択肢に鯖江市で暮らすことを含める学生が増加することが考えられる。また、定期的な学生の誘致は、都心と地方の締結にも成り得る。

● 学生の目的

地方の高齢化、後継者不足、消滅可能性都市、といった数々の問題は、文献調査だけで解決を図れるものではないと我々は考えた。実際に一つの市町村で学ぶことができれば、それはとても有意義なものである。本企画で学生は、地域活性化にまつわる活かした学問を学ぶことができる。加えて、実際に自分で解決策を考え、実行することができる。学生は、大学で座学を受けるだけでは得ることのできない、莫大な経験を本企画で得ることができるのだ。

4. 企画概要と分析

私たちは鯖江市を将来的に活性化させるため、より多くの若者を鯖江市へ移住・定住させるための方法として、鯖江市にキャンパスを作ることを提案する。そこで考えた教育目的は、「鯖江市に貢献出来る人材育成」である。

企画概要としては、鯖江市と明治大学が提携して現地フィールドワーク型の集中講義を計画し、その計画を市が他大学に持ち込む。地域創生に意欲的な大学もしくは鯖江市にゆかりのある大学の参加を募り、参加大学内で単位互換制度を採用する。具体的に大学名を挙げると、明治大学と同様に市と提携してプログラムを行っている金沢大学が期待できる。

● 学生層の取り込み

総人口に問題を当てているのは何も鯖江市に限ったことではない。中には、完全に産業が荒廃し町全体の運営がままならないような限界集落と呼ばれる市町村も現実には存在している。人口減少は産業の衰退、行政の凍結、過疎化を招く直接的な要因にもなる。

鯖江市の現状はどうだろうか。確かに産業は緩やかな下り坂を描きつつ、人口は減少とは言わないまでも増加傾向にはない。現在鯖江市が直面している問題といえ、他企業の進出による得意の眼鏡産業の伸び悩み、伝統工芸である漆器をつくる職人の後継者不足、河和田地区の過疎化などがあげられるであろう。これらの諸問題を解決するには学生の取り込みが最適である。

そもそも鯖江市には他の市町村とは違い、町が発展するだけの十分な余地が含まれているように思われる。たとえば、鯖江市が得意としてきた眼鏡フレームの需要は下がってきてはいるといえども、そのチタン加工技術はいまだに類を見ない最先端の技術である。また、越前漆器は芸術作品という観点から言えば日本最高峰の代物でもあるし、かつてコシヒカリを開発するなど、工業・農業ともに不向きな環境にあるとはいえない。

それでも産業に活気がないのは、市場と生産が行違っている、いわば「おくらしている」状態に鯖江市が有るからである。たとえば、コンタクトレンズの市場介入、および安価な中国産製品の流入により、国産の眼鏡のフレーム自体の需要はほとんどなくなっている。これは鯖江市の工業が衰退を辿ることになった原因でもある。しかしながら、スマートグラスや医療機器などに使われているように鯖江市のチタン加工技術への需要はまだ存在している上、まだまだ高い需要増加を見込める。漆器も国内需要はそれほど高くないにしても、海外に市場を拡大することができれば、それなりの需要が見込める。

このように何も新しい産業に手を出さなくても、鯖江市には十分な資材が存在している。問題なのは、これらの「商品」をどのように売り込んでいくかである。この問題を解決してくれるのが、学生、

それも都心で就職競争にもまれ経験はなくても実力を十分に兼ね備えている学生である。

もし、鯖江市に幅広い分野でチタン製品の注文を受け生産を依頼する商社が現れるとどうなるだろうか。もし海外に鯖江市の漆器を売り込む人間が現れたらどうなるだろうか。それは、間違いなく鯖江市の産業の停滞に、発展の兆しを生むきっかけにはならないだろうか。鯖江市を救うのは紛れもなく、宝の持ち腐れになっている資材を新たな分野で活用していくことができるような将来をもつ学生の取り込みである。

● 大学の設置

ただ、問題は都心の学生に「鯖江市で事業を展開する」という選択肢が得られないことである。鯖江市という名前は知っていても、その用途は雑学を引き出すためのファクターにすぎず、自らの人生を左右する場面では完全に忘れ去られている。

この流れを断ち切るためには、学生が鯖江市に関わる機会が必要不可欠である。特に都心の大学生ともなれば、その数は計り知れず大きな期待がもてる。まずは、この都心の大学をターゲットにするべきである。昨今の大学はどこも学生数の獲得に力を入れている。明治大学では、就職キャリア事務室の設置や、OB・OGの存在といった個性を打ち出している。その他、留学制度やインターンシップ、特有の研究施設や奨学金制度など、どの大学も他の大学にはない個性を打ち出すのに必死になっている。その中で、フィールドワーク学習というのは一つの選択肢である。最近では、就活生に大学時代の成績よりも、アルバイト経験や留学経験を通して何を学んだかといった、実体験に基づく個性を重視する傾向にあるといえる。自ら足を運び、自分たちで課題テーマを決め行動するフィールドワークは実にその要望に応えられる学習形態である。

そこで、鯖江市でこのフィールドワーク型授業を展開するのは、流行を捉えた孝策であると考えられる。鯖江市には工業もあり、農業も存在する。しかし、後継者不足や市場展開の不足、商店街の行き詰まりなどさまざまな問題も存在する。これは、いま話題となっている地方創生の妨げになる根本的な問題であり、これらの解決に力を注ぐことはひとときわ注目を集めることになると思われる。鯖江市に大学を設置して、将来鯖江市のために知恵をはたらかせ、鯖江市において事業を展開する若者が増えれば、それは鯖江市の地域活性化につながることであり、さらにいえば新たな雇用が誕生することで人口流入も大きく期待できる。これは、鯖江市の需要、大学の需要、日本の需要を兼ね備えた事業である。

5. 四つの講義例

以下に4つの例を紹介する。

講座名：＜鯖江の伝統工芸の海外展開を考える＞

目的：鯖江市の三大地場産業（眼鏡・漆器・繊維産業）の活性化

概要：古くから「ものづくり」が盛んである鯖江に根差す三大地場産業を、海外に発信していくことでより需要を高め鯖江のブランド化を図る。実際に学生が海外との窓口の役割を果たし、国際流通の基礎や実践を通して発信力を得る方法を学ぶ。鯖江市側としては、「外部へ魅力を発信する力の弱さ」を学生と協力し克服する方法を模索する。

詳細：「ものづくり産業」は戦後日本における基幹産業であり、かつては世界で抜群の競争力を持った分野だった。未だに世界でもトップクラスの技術を持つが、円安傾向や国内需要の低下によって近年では生産が下降気味である。特に伝統工芸品は、世代が変わるごとに伝統への親しみが薄くなってしまいがちなことや、グローバル化による外国文化流入の影響も相まって国内需要が伸び悩んでいる。その一方、近年では海外の視点から日本の伝統文化に対する再評価が活発化してきた。国内需要が伸び悩む現状の問題を解決するため、鯖江の伝統工芸を世界へ発信していく有効な方法を探る。

カリキュラム：前半→鯖江市の伝統工芸体験/現地調査
後半→現地調査/プレゼン準備

期間：約2週間（事前授業あり）

評価：最終的に外国人が行う。グループの中で順位を決める、海外の伝統工芸品と競い合う、など発信の効果に対して競争する状態を作る。

講座名：＜鯖江のより効果的な魅力発信を考える＞

目的：都会（東京圏や大阪圏など）の人々に鯖江の魅力を発信
「ものづくりの町」鯖江市の全国的知名度上昇
メディア系志望の学生の経験

概要：現在も行われている鯖江市の情報発信方法の問題点を分析し、学生らが自ら解決策を考え自ら実行していく。最終的に都心でそれぞれの成果を上げることを目標として、鯖江市の魅力を都心の人々に効果的に伝える手段を模索する。現代の社会ではメディアの情報により観光客の増加や製品の売り上げがよくなることは多々ある。そこでどのようなPRをすれば効果的かを学

ぶ。

詳細：①鯖江市について知らなければ PR はできないので鯖江について現地のかたに講義をしていただく②座学において学んだことを実際に自分の目で確かめるためのフィールドワーク③自分が特に興味を持ち PR したいと思った部門（例：鯖江市の伝統工芸・鯖江市の眼鏡・鯖江市の商店街）について詳しく調べる④PR されるものに携わる人と意見交換（どのようなことをアピールしてほしいかなど）⑤実際に PR するための動画やパンフレットなどを作成（現在発信力がもっともあるツイッターや Facebook などの SNS を活用する等）学生からの斬新なアイデアを期待⑥作成したものを市長さんや市の職員に見てもらおう

カリキュラム：前半→メディアの学習/PC の使い方/鯖江市の伝統工芸体験/現地調査 後半→現地調査/情報伝達媒体づくり

期間：約 1, 2 週間（事後授業あり）

評価：優秀な案を選出し、講座終了後は引き継いで行政や現地 NPO 団体、もしくは市民が自主的に維持することを約束する。市長さんや市の職員に見てもらった時にそれぞれのものに点数をつけてもらい点数の高いものから順に成績をつける。

講座名：鯖江で学ぶ「最先端」講座

目的：鯖江市を通して、各分野の最先端事業を理解し、それらの向上を目指す

概要：鯖江市が展開する最先端の「チタン加工技術」や「行政事業」などを分野ごとに分け、それぞれの内容に迫り、より深い知見と教養を身に着ける。実際に目で見て体験することで、それぞれの分野を学生の意見により向上させる。

詳細：鯖江市のチタン加工技術はいまだ類を見ない最先端の技術力を持っている。また、行政分野においては J K 課の創設や諸々の移住者支援制度など積極的な事業展開が見られる。このような事業を実際に体験し、また自らの知識・経験に基づいて更なる向上を目指すような機会は学生時代にはなかなか味わうことができない貴重な時間である。鯖江市にはそれらの資材があり、学生の意見を受け入れられるだけの気概もある。それらの地域性を存分に生かし、学生と市が相互利益を図れるような授業展開を行う

講座名：＜サテライト農業を考える＞

目的：鯖江市の農業に新しい技術を組み込む

概要：都心の学生が鯖江市の農地を活かし、新たな産業として農業を復興させる方法を考え、それらを実践していく。

詳細：鯖江市の農業は現在高齢化の影響により深刻な後継者不足に陥っている。地元の学生や若者は都心へ流れていき、空き地となった農地や空き家もところどころに存在している。現代日本の実情を考えるならば、これらの農地に若者を踏み入らせる方法を考案するのは極めて困難であることは言うまでもない。そこで一つの打開策として考えられるのがサテライト農業である。鯖江市の農業が衰退しきってしまわぬよう、サテライト農業の実験地として授業と連携し、今後の復興策を考えていく。

6. 企画実施に伴う相乗効果

この企画を実施することで、期待できる良い効果について述べたい。第一に、若者が一定の期間、鯖江市で活発な行動を行うことで一時的ではあるが鯖江市の若者人口が増えることになる。こういった若者を対象とした街の開発等も行われ、鯖江市自体の活性化につながるだろう。行われるイベントへの強制参加を学生に義務付ければ、鯖江市民と都会からの学生間における交流の深化と共に、イベント自体の活性化を図ることができる。また、河和田地区の空家を学生に向けて貸し出し、街へのフィールドワークを行うことで、鯖江市内において東から西への移動が活発になる。職人や高齢者の多い東側の中山間地から西側の中心市街地への、つつじバス等の交通手段の充実が期待できる。

7. おわりに

4人とも福井県を訪れるのは初めてながら、鯖江に住む方々の暖かさを大いに感じ、鯖江独自の「ものづくり」文化に触れ、2泊3日という短く駆け足なスケジュールの中で鯖江市の魅力を十分に感じることができた。私たちが感じた鯖江の魅力をより外部の若者に知ってもらうにはどうすべきなのか。様々な問題点が挙げられ、グループでの話し合いの末に、最終的に最も包括的な案として「鯖江キャンパス設立」に纏まった。鯖江市はその魅力に反して、それを外部に発信する力が弱いと感じる。都会の大学が地方に大学の支店を作り、今まさにホットな話題となっている地方創生の問題に実際

の現場で取り組むという例は非常に珍しく、それだけで十分話題性がある。また国外・国内という2つに分けて、地域の魅力発信方法についての講座設定をすることにより、さらに鯖江の魅力を知る若者を増やす効果が期待できると考えた。明治大学に関しては、現在、グローバル化が進み明治大学は海外を意識したカリキュラム編成に力を入れ、スーパーグローバル校にも選出された。解決の見えない地方問題にも先駆けていくべきだ。

最後に、私たちにこのような機会を与えて下さり、暖かく迎えて下さった鯖江市の皆様に対して、感謝の気持ちと共に、この政策提言をおえたい。